
雨の日の大佐に10のお題

桐生 拓人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日の大佐にー〇のお題

【Zマーク】

Z5828A

【作者名】

桐生 拓人

【あらすじ】

ロイやHデワード、軍部のメンバーのある雨の日の日常。ギャグです

1：無能（前書き）

全てのキャラクターにおいて壊れています。注意！

1：無能

1・無能

「あーあ。なんか雨降つてきそつだよ」

言われて空を仰いでみれば視界いつぱいに広がる灰色の空。空気も生暖かく独特の匂いが風にのつて鼻へ運んでくる。

「さつきまであんなに晴れてたのにねー」

買い物袋を抱えたアルフォンスは、この後ネルサちゃんに餌やりでいく予定だったのに、とぼやいた。

「夕立だろうし…直ぐに止むだろ」

同じように袋を抱えたエドワードが言つた。

「一雨来る前に宿へ帰るか

「そだね」

言い終わらないうちに一人は曇り空の下、邊ったイーストシティ

の路地を走った。

そーだ。こんな日くらには無能になる前に迎えに行つてやるかな…

「『じめんアル。傘持つてる?』

走つっていたエドワードが唐突に言った。

すると、既に悟つていたらしいアルフォンスは止まって、袋の中から傘を取り出した。

「はいはい。どうぞ迎えに行つてきて下さい。ついでに朝まで帰つて来なくていいから」

あんまりな言い様に思わず赤面して振り返るが、弟のほうが一枚上手。傘を押し付け追い出されてしまった。

「…何かムカつく…」

サア

：

「…はあ…」

ロイ・マスタングは窓を眺め、そして机の上を眺め嘆息した。
なぜ、如何して書類の多い日に限つてこうひ雨が降るんだ。このま
までは雨の日無能説が…っ！

「大佐。窓ではなく書類を見てください」

優秀な副官は、雨の日だらうと書類が多くうつと容赦しない。綺麗な顔で、無言で睨まれるとなおさら怖い。

「大佐あー。まだスカあ？」

間抜けな声で、ついには他の部下達も騒ぎ出す。そのままではいざれ…

だが、このジメジメしていればやる気が出ないのは誰だってそう（なハズ）。うちの部下ってば如何してこの血の氣ばかりが多いんだか。

「…お前達は雨。やじやないのか？？」

するとみな一回顔を見合せた。

「嫌も何も。仕事ありますし」

「雨に降られても建物のなかですし」

なんてやつらだ。こんなノーランチなやつらは私の苦惱はわかるまい。

「大佐はどーしてやなんですか？」

「だって。雨の日は湿氣てるし。髪の毛跳ねるし。書類多いし。外に出たくない」

「…

アンタは女子高生かつ…！…！…

「…

リザは眉間に青筋を立て、おもむろにホルスターから愛銃を引き出す。標準はもちろん……

「大佐が湿氣たマッチだらうとアホモだらうと書類溜めようと無能には変わりないんですつ。アホなこといつてないでさつと仕事してくださいー！」

ハート

でないとアナタの心臓を狙い撃ちー！

ショックを受けながらも一心不乱に書類に書き殴るロイ。それを鬼の目で見つめながら愛銃を鞭の様に振るい荒れ狂うリザ。

足元で蹲る部下達は思った。

ああ……Iのヒトは遂にキレてしまった……

ひうなつては誰にも止められない

ナウ 力の王蟲の様に……………！

と。

「こんちわー。大佐いるー？？」

恐る恐る扉を振り返れば、かの有名な金髪の最小国家錬金術師。

「何？」

訂正・最年少国家錬金術師。

「中尉？ 如何したの？」

少年の声に自分を取り戻したリザは、ロイの襟元を掴み上げたまま視線を下げる。そこには弟のように可愛がっている三つ編みの彼。「あらエドワード君よく来たわね。お茶なら今入れるわ」

摩訶不思議。荒れ狂った鬼も、国家錬金術師の手によれば優しい女神に。

「中尉、 大丈夫？」

子犬のように見上げてくるエドワードに、リザはメロきゅんゝ何もかも理性も愛中も放り出してエドワードを抱き締めた。

「全然平気よ。どつかの無能がちょっと使えなくなつたくらいでどうもしないわ」

「ちょ、 中尉！私のエドワードを話したまえ！」

「（ちつ）わかりました。じゃあ、お茶持つてくるわね」

今ちつて言つた？ねえちつて言つたよね？？

「もお！大佐も中尉困らすんじゃないぞ？」

「ああ。もう一度とあんな恐ろしい思い」めんだ（しみじみ）」
何とか手中にエドワードを取り返したロイは、じ満悦の様子でまた仕事を始めた。

そのざまを見て今まで傍観していた哀れな部下達は思った。

ああ…ナウ カだ…ナウ カは最年少国家鍊金術師だつたんだ…

!!

「ねえ。終わつたあ？」

それから数時間後。空もすっかり真っ暗になり、雨脚も大分強くなってきた頃、数時間ぶつ続けでロイの膝に座り続けたエドワードはいい加減痺れを切らすのを通り越え、限界へのチャレンジデスマツチ！な心境だった。

(心配なんかしないで、とつとと帰ればよかつた)

「…終わった…。長く待たせてしまつてすまなかつたね。さあ、すっかり暗くなつてしまつたことだし帰るとしようか」

ようやくロイの膝から開放され、思う存分萎縮しきつた筋肉を伸ばした。明日になつたら筋肉痛になつてるかもしれない…。

玄関口まで来て、ロイが一言。

「傘忘れた…」

残念なことに、わずか29歳にして早くも健忘症か？ロイ・マスターング…！

ロイの頭には、最早リザに散々虐めぬかれた記憶しか残っていない。

「…無能

おまけに恋人からのこの一言。さすがに痛烈。色々こみ上げるものをお呑み込んでロイが振り返ると、田の前に、傘。

「一個しか…ないけど」

お客さん入りますか？

無言で睨み上げながら傘を差し出してくれる少年。ついに反応できずに固まる中井。

「…ありがと…」

ええ、よろこんで。

さすがのロイも、この口ばかりは無能説を甘受しない訳にはいかなかつた。

fin

2 優秀な部下達（前書き）

この話は”無能¥”の続編となつております。単体でも読みます
が、気になる方は無能を先にお読み下さい。
それでは

2 優秀な部下達

ザアアアア

:

昼間から絶え間なく降り続く雨は、夜の暗闇と静寂の中でいよいよ本降りとなつて行った。窓の外では大量の雨粒と水滴で発生した霧で、完全に世界から隔離されていた。

何もかもが暗闇と雨音に搔き消され、遮断されたこの部屋は最早

異質の空間と化していた。

い
繫

九二嫌

ギシッ

ひんやつと冷たいこの部屋で

吐き出す熱い吐息と脛汗。

寒いのに熱い

静かすぎて煩い

矛盾した空間は徐々に狂氣を孕んで

蘇える悪夢と化す

さん

兄さん

おる

アルフォンス

『めん

『じゆくせんせー

やつオレにはお前が見えない

ନୀତିବ୍ୟାକାଳୀନ

彼方へと消え入る声で

オレを

呼ぶのは誰れ？

兄さん

၅၅

じめんね

おまえを

おまえだけをあいしていたよ

す
き

すか

おれのせいいで、姿を亡くした

魂だけの

ハラカラ

いとしい同胞

すき

¶
¶

号
號

これは

甘美なる

自決の夢

え
ど

ほ
り、
また

えどわーど

呼ばれるたびに

足元に巣食う“死”はその赫い口を近づける

もつと

その声で

オレを呼んで

スルガード

興奮した精神は身体に影響を齎し鼓動を跳ね上げる。

見開いた視界は闇。覆いかぶさるようにこちらを向つていて。

「闇に喰われたのか？」

そうかもしねない。

見開いた瞳からは後から後から水が湧き出でてくるし、シャツも掌も湿つてするりと滑る。

明日、乾涸びたら如何しよつ。

そんなことも気にせず、闇は静かに言つた。

「私が、全て取り戻してやるつ」

闇に喰われた君の全てを。

だからもう寝なさい。

朝まではまだ大分ある。

そつと田元を拭われる感触と暖かい指。先ほどとはまったく違つ
穏やかな闇に、ゆらゆら意識も溶けていく。

取り戻すなんて無理だよ。

だつ
て

あの闇は

アンタ自身だもの。

もうじてまた

ああ、喰われる。

気が付けば白い世界。

眩しいシロのなかで氣だるい身体を起こしてみれば、昨日の出来事が全て本当だったことを実感する。

良かつた乾涸びてなくて。

「おそよう。すっかり冷めてしまった昼飯ならあるのだが食べるかい？」

声がした方へ顔を向けると、ロイがこちらへ水の入ったコップを差し出していた。

乾涸びていないとはい、カラカラだつたこともまた事実なので水はありがたく受け取つておくことにした。

やがて全てを飲み干したとき、あえて質問には答えずにエドワードは別の質問を投げかけた。

「服は」

「あそここのハンガーにかかっている」

指差したほうにはクローゼット。丁寧にもあそこに掛けたのか。ベッドからおりて手早く自分の服に着替え、そのまま扉へ向かうエドワードにロイが言った。

「もうこゝのかい？」

もう少しゆづくりしたつていいのに。

「……オレは、アンタのお荷物にはなりたくない」
せめて背中くらいは預けられる人物でありたい。

あの優秀な副官のように。

下を向いて俯くエドワードにロイが言った。

「君は一人一人に自慢してまわりたいくらい優秀で可愛い私の部下だよ」

だから、大丈夫。

「因みに今朝アルフォンス君から電話があつたのだが、今日明日と中尉の家でお世話になるそうだから。君をよろしくと頼まれた手前、

一人で宿に帰すことなんてできるわけないだろ？」「

「なつ」

さあ。そう慌てないで。

遅いティータイムといたしませんか？

「中尉。中尉はいつから知つてたんすか？」

「大分前からかしら。長い付き合いだもの。態度見てれば判るわよ」

「あの二人、まだ気付いてないと思ってるのかな」

「まったく。優秀な部下がいないとたよりないんだから」

NEXT 3たまには、のんびり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5828a/>

雨の日の大佐に10のお題

2010年10月9日16時43分発行